

日本都市社会学会ニュース

No. 82 (2009. 3. 30)

発行：日本都市社会学会

事務局：〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

立教大学社会学部江上渉研究室内

e-mail: u-socio@grp.rikkyo.ne.jp

fax: 03-3985-2833

URL: <http://www.soc.nii.ac.jp/urbansocio/>

振替口座 00140-4-703976

歓迎の言葉

県立広島大学 山本 努

第27回日本都市社会学会を県立広島大学（広島キャンパス、2009年9月12日、13日）で開催させていただく事になりました。皆様の御来学、心よりお待ちしております。

県立広島大学は1928年発足の県立広島女子専門学校（女専）に淵源をもつのですが、2005年に広島県立大学（庄原市）、広島県立保健福祉大学（三原市）、県立広島女子大学（広島市）を統合して、県立広島大学（庄原キャンパス、三原キャンパス、広島キャンパス）として発足しました。このような訳で、県立広島大学は出来てまだ年浅く、広島市民には今ひとつ、認知されていないように感じています。タクシーなどに乗りましても、「県立広島大学まで行って下さい」では、スムーズに話が進みません。大抵、「広島大学ですか？」と聞き返されます。「県立」の部分は馴染みないようで、聞いてくれません（加えて、県立広島大学の割に近くに、広島大学の千田キャンパスがあるという事情もあるようです）。そこで、「元の広島女子大です」といえば、「ああ、宇品の女子大ね」という事で、話はすぐに伝わります。

少し前に、井上ひさしの『父と暮せば』（新潮文庫）という戯曲を読んだのですが、主人公は広島女子専門学校の陸上競技部出身の図書館員（国文科を卒業した）という設定になっています。美しい広島弁で書かれた名作だと思うのですが、出てくる地名など、県立広島大学（広島キャンパス）付近のものが多いです。JR広島駅から路面電車でこられる方は、「比治山線」に乗ってこられる事になるのですが、このような地名も出て参ります。ちょっと読んできて頂ければ、楽しみが少し増えるのかもしれない。

県立広島大学（広島キャンパス）の都市社会学会会員は私一人です。少人数教育を標榜する大学で所属ゼミ学生、院生も少数です。このような次第で、学会をお引き受けするには、人的資源（労働力）の決定的な不足を心配おります。また丁度、学内の教室改修の時期にあたり、学会報告に適切な設備や大きさの部屋が利用できるか？ この辺りも不安ある次第です。このような事情もあり、行き届かぬ点、多かろうと存じます。ご容赦お願い申し上げます。

1. 日本都市社会学会 第27回大会開催について

期間 2009年9月12日(土)～13日(日)

会場 県立広島大学(広島キャンパス)

〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号

キャンパスアクセス http://www.pu-hiroshima.ac.jp/05_campus/08_access/index.html

2. 交通・宿泊の案内

○県立広島大学までの交通の案内

●JR 広島駅から

【バス】広島バス「31号(翠町)線」にて25分「県立広島大学前(広島キャンパス)」下車-徒歩5分

【市内電車(路面電車)】[5] 広島港(宇品)行きにて30分「県病院前」下車-徒歩7分

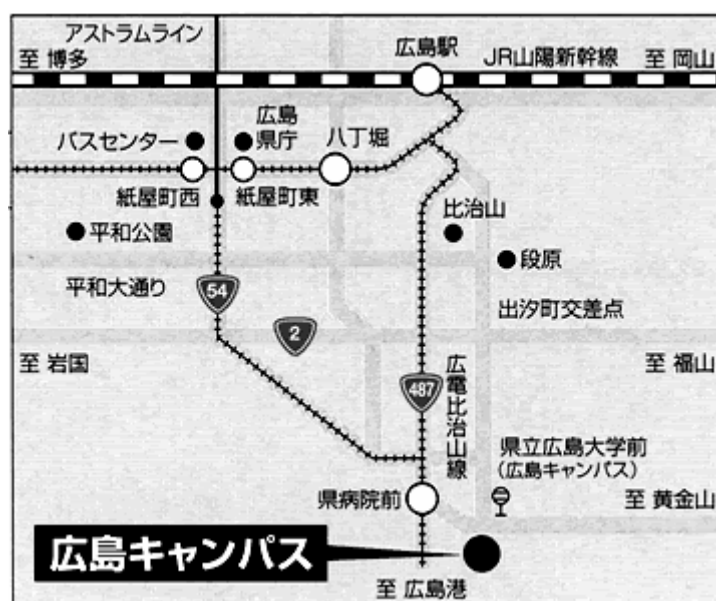
【タクシー】15分、1500円

●広島バスセンター(広島電鉄、「紙屋町西」または「紙屋町東」)から (*中区宿泊の場合は、こちらのルートが目安です)

【市内電車(路面電車)】[1][3] 広島港(宇品)行きにて30分「県病院前」下車-徒歩7分

●広島空港から

リムジンバスで広島駅(45分)、または、広島バスセンター(50分)へ。



○宿泊の案内 (シングル料金の目安です。正確な料金は御予約の際にお確かめ下さい。)

ホテルグランヴィア広島 広島市南区松原町1-5 (JR広島駅新幹線口隣接)

電話 (082) 262-1111 13500円

ホテルヴィアイン広島 広島市南区松原町2-50 (JR広島駅南口隣接)

電話 082-264-5489 6825円

グランドプリンスホテル広島 広島市南区元宇品2-31

電話 (082) 256-1111 11000円

オリエンタルホテル広島 広島市中区田中町6-10

電話 (082) 240-7111 9000 円
ホテルサンルート広島 広島市中区大手町 3-3-1
電話 (082) 249-3600 6500 円
コンフォートホテル広島大手町 広島市中区大手町 3-7-9
電話 (082) 545-7811 5500 円

- ① 広島市中区、又は、南区の範囲で、路面電車（広島電鉄）の駅が近くにある宿ならば、大学まで比較的便利です。
- ② 中区は広島の繁華街、ビジネス地区で、宿泊施設も多くあります。
- ③ 南区は広島駅付近に多くの宿泊施設があります。

会員の皆様へのお知らせ

1. 自由報告の募集 ※申し込み方法にご注意ください

第 27 回大会の自由報告を募集します。どうぞふるってお申し込み下さい。

なお、自由報告の申し込みと同時に報告要旨を提出していただき、7 月発行の「学会ニュース」（83 号）に自由報告要旨を掲載することになっております。

自由報告を希望される会員は、下記の要領で、自由報告の申し込みと自由報告要旨の提出を同時に行ってください。

(1) 自由報告の申し込み及び報告要旨の提出方法（締め切り：2009 年 6 月 7 日（日））

次の①～⑤を A 4 サイズ 1 枚に記し、保存した文書ファイルを、**6 月 7 日（日）午後 6 時までに学会事務局（u-socio@grp.rikkyo.ne.jp）に E-mail に添付してお送り下さい。**

①報告タイトル（仮題は不可です！）、②報告者氏名・所属（共同報告の場合は登壇者に○をつける）、③報告要旨（50 字×20 行以内を厳守）、④発表時に使用する機材、⑤連絡先（郵便番号・住所・電話番号・E-mail アドレス）。

なお、使用する機材については、会場の都合により不可能となる場合もあります（パワーポイントを使用する場合、PC は持参していただきます）。また、申し込み締め切りを過ぎたものについては一切受け付けないことになっています。メンテナンスなどのためにサーバが一時不通になることもありますので、余裕を持って申し込みされるようお願いいたします。

(2) 注意事項（必ずお守り下さい！）

共同報告の場合、登壇者は日本都市社会学会の会員に限ります。なお、未入会の方が報告を希望される場合は、申し込みを行う前に、入会の手続きをお済ませください。入会手続きについては学会ホームページをご覧ください。

添付ファイルは、原則としてテキスト形式とします。Microsoft Windows を基本ソフトとするパソコンで作成したものに限り、「Microsoft Word (2003, 2007)」形式でも結構です。

- ① 「報告の要旨」を会員に事前にお知らせすることを目的としていますので、図表は入れ込まず文章のみで作成してください（学会ニュース 1 頁に 2 報告の要旨を掲載します）。
- ② この要領に反し、本文が 1 行 50 字で 20 行を超えていたり、図表が入っていたりする場合は、数日以内に訂正をお願いすることになります。また、期限内に訂正されない場合は、報告を放

③ なお、大会当日にレジュメ／資料を配付する場合は、各自で別途ご用意下さい。

<自由報告申込みと報告要旨原稿の提出>

締め切り：6月7日（日） 午後6時までに事務局必着

申し込み・報告要旨原稿提出の方法： E-mail による

申し込み・報告要旨原稿提出先： 学会事務局 u-socio@grp.rikkyo.ne.jp

2. 理事会報告

2008-2009 年度第2回理事会が3月8日（日）午後3時から立教大学で開催されました。①役員選出規程（地方区選出理事）の改正、②『年報』投稿規定の改正、③学会賞（若手奨励賞）の部門新設、④社会学系コンソーシアムの評議員選出、⑤次回大会について、⑥次々回大会について、⑦次期事務局について、⑧入会・大会の承認などについて審議されました。なお、④社会学系コンソーシアムの評議員については町村敬志会長、早川洋行常任理事を選出しました。

（事務局担当理事 江上 渉）

3. 企画委員会報告

第27回大会では、テーマ部会「アジア都市の現在—グローバル化と都市経済、コミュニティ、文化の変容」とシンポジウム「世代と移動の都市社会学——戦後日本の地域社会変動を読み解く」を開催することになりました。それぞれ概要は次の通りです。

（常任理事・企画委員長 渡戸一郎）

<テーマ部会概要>

「アジア都市の現在—グローバル化と都市経済、コミュニティ、文化の変容」

【趣旨説明】

アジア都市の社会学的研究として従来よく取り上げられてきたのが、過剰都市化と都市の貧困問題である。確かに「過剰都市化」やその結果生じる都市スラム・都市インフォーマル部門は依然深刻な状況にある。しかしアジア社会は近年ダイナミックに変貌しつつある。経済発展は目覚しく、生活様式は欧米化し、次々に建設される巨大なショッピングセンターにはたくさんの消費者が集まり、コンビニエンスストアも町の風景の一部になりつつある。このような都市的消費生活の変化の背後にあるのが、一方では外資系、民族系小売業者の激しい競争であり、他方「都市中間層」の成長に代表される新しい嗜好をもった消費者の存在である。この結果生まれた新しい「都市文化」は、欧米文化の一方的輸入ではなく、現地の文化的社会的文脈を反映するものであり、また都市の空間構造の中にその刻印を残しつつある。ここでは変貌著しい「アジア都市の現在」を理解するために、まず都市商業の発展と、それに伴って生じつつある都市の社会・空間構造について議論する。

このようなアジア都市のもう一つの特徴は、多民族社会であることである。従来アジア都市の多くでは、華人、インド系外国人を含み多くの外国人が居住し重要な役割を果たしてきた。多くのアジア都市は植民地経営の基地であったため、欧米文化の影響も色濃く残している。アジア都市の空間構造の中に、このような「文化の重層性」を見出すことも不可能ではない。しかし、近年アジア各国間の経済格差の拡大に伴い、労働過剰国から労働過小国へ、低賃金地域から高賃金地域へ労働力の移動が生じている。その移動も隣国への移動ではなく、かなり遠方への移動も含み、ダイナミックに展開しつつある。従来から経済的影響力の強い「華人」については、単なる移民ではなく、国境を越えたネ

ットワークを形成しつつあるように思われる。シンガポールは典型的な移民労働者の受入国であるが、多くのアジア都市では、このような国際労働移動の結果、外国人移民数が増加し、また出身国の多様化が進んでいる。

しかしこのような移民の増加は、移民社会と受入現地社会との間で時に軋轢を生じさせ、それが国際問題となる場合もある。現在日本でも、外国人移民の増加にともない「多文化共生」のあり方について議論が行なわれているが、在日外国人問題も、このようなアジアに広がる移民社会の一端としてとらえる視点が必用なのではないだろうか。アジア都市に見られる「新しい民族問題」は、アジア都市社会の重層性について問い直す必要を示唆している。本テーマ部会では、以上二つの観点から「アジア都市の現在」について紹介するとともに、理論的には欧米の都市社会学に依拠することが多い日本の都市社会学に、新たな研究対象と理論的切り口を提供しようとするものである。（新田目夏実）

報告者：川端基夫（龍谷大学経営学部）

川崎賢一（駒澤大学）

Wonho Jang（ソウル市立大学）

司会者：新田目夏実（拓殖大学国際学部）

＜シンポジウム概要＞

世代と移動の都市社会学——戦後日本の地域社会変動を読み解く

【企画趣旨】

21 世紀に入って、日本社会はついに人口減少社会に突入した。進行する少子高齢化は、都市の勢力を弱めるばかりでなく、農山村地域では集落の限界・消滅をさえもたらすと予想されている。大都市部においても、農山村部においても、コミュニティのあり方、その存続可能性さえもが問われ始めている。日本都市社会学は、このような日本の地域社会状況に対して、どのような展望を提示しうるだろうか。

このシンポジウムでは、21 世紀初頭までにたどりついた日本の地域社会変動の到達点を、都市社会学の視点から、とりわけ世代と移動の観点に着目して読み解いていく。実証分析をふまえた学会員の綿密な分析をふまえ、過疎地域と地方都市、そして大都市を対比しつつ、21 世紀の都市－農村状況について、参加者とともに議論していきたい。

日本都市社会学では、戦後日本の地域社会変動について、地域間の人の移動、とくに農村部から都市部への、あるいは地方から中央への移動に注目して読み解いてきた。戦後から現在までに、市部人口・郡部人口の割合は完全に逆転したが、この間、1～3 世代の出来事にすぎない。しかし、こうして生じた世代間・地域間の変化・格差の創出は、ライフスタイルや価値観、基礎社会としての家族や集落の変化をともしつつ、さらにこれから大きく社会を変容させていくことが予想される。

各報告では、戦後日本の地域社会変動について、世代と移動の観点から整理し、かつ現段階で予測される将来展望を、過疎農山村・地方都市・大都市のそれぞれの視点から提示していく。報告者として、徳野貞雄（熊本大学）、玉野和志（首都大学東京）、山下祐介（弘前大学）の各会員を予定。コメンテーター（鰐坂学・松菌祐子両会員）および当日のフロアには、戦後から 21 世紀までの地域社会変動の読み解きの深化とともに、これから展開される新たな都市＝農村関係、新たな地域社会像について有意義な議論を期待したい。司会は、山本かほり、中西典子両会員の予定。（山下祐介）

4. 編集委員会報告

『年報』第 27 号は、9 月に開催される第 27 回大会で会員の皆様に配布する予定です。

今回の年報では、昨年の第 26 回大会で開催されたシンポジウム「郊外ニュータウン開発と地域の記

憶」を特集します。

その他、例年どおり、自由投稿論文、書評などが掲載される予定で、目下、編集作業を行っています。最終工程の編集と印刷は、引き続きハーベスト社に委託して進めます。

最後に、『年報』に関するご意見、ご要望がありましたら、滋賀大学の編集委員会事務局までご連絡下さいますようお願いいたします。

(常任理事・編集委員長 早川洋行)

5. 『日本都市社会学会年報』28号(2010年発行)

自由投稿論文・研究ノートの募集について

編集委員会では、『日本都市社会学会年報』28号(2010年発行)に掲載する「自由投稿論文」「研究ノート」および「書評リプライ」を募集します。投稿を希望される会員の方は、『年報』27号(2009年発行)に掲載される編集規定、投稿規定、および執筆要項をご覧の上、審査用原稿(3部)を2009年11月30日(消印有効)までに編集委員会事務局あて、余裕をもって郵送して下さい。なお25号より英文要約を掲載することとなっております。投稿ご希望の方はこの点お含みおき下さい。会員諸氏の奮っての投稿をお待ちしています。

投稿資格のないもの、投稿期限を過ぎたものは一切受け付けられませんので、くれぐれもご注意ください。

※本年9月の大会終了後、編集委員会事務局が移転する予定です。これにあわせて投稿原稿の送り先も変更になります。詳細は11月初旬までに発行予定の「学会ニュース」または学会ホームページで確認して下さい。

(常任理事・編集委員長 早川洋行)

(2009年大会まで)

〒520-0862

滋賀県大津市平津 2-5-1

滋賀大学教育学部 早川洋行研究室 気付

日本都市社会学会編集委員会事務局

電話・FAX: 077-537-7787 (早川研究室直通)

E-mail: hayakawa@edu.shiga-u.ac.jp

中村八朗先生を偲ぶ

町村敬志

本学会の設立時世話人のお一人で、理事、監査を歴任された中村八朗先生が、昨年12月に逝去された。暮れも押し詰まった頃、やはり直前にご逝去の報に接した内藤辰美先生からのご連絡によって、筆者は先生のご逝去を知った。町内会研究で早くから知られ、『都市コミュニティの社会学』(1973年)によって日本都市社会学におけるコミュニティ研究を大きく進展させた先生は、同時に、その個性的でユニークなお人柄と行動でよく知られる存在であった。学会等の場で何度となく厳しいコメントをいただき、正直、近寄りがたい印象をもっていた先生と頻繁にお話をさせていただくようになった

のは、1988 年、先生が勤める筑波大学に赴任し、先生の後を受けて都市社会学の講義を担当するようになってからだった。

1925 年、富山県伏木に生まれた先生は小学校時代に東京へ移り、その後、旧制第四高等学校（金沢）に進まれたが、敗戦直後の 1946 年、家の都合で中退を余儀なくされた。家族の生活を支える必要に迫られた先生は、地元伏木のちに横浜の港で、荷役貨物の数を検査する仕事に就く。さらにその後、駐留米軍の翻訳官として、1955 年まで仕事を続けられた。この間、勉学の思いを断ちがたかった先生は、仕事の傍ら、関東学院の短大、ついで東京都立大学人文学部で学ばれ、そこで社会学に本格的にふれられた。その後、国際基督教大学社会科学研究所助手、社会保障研究所研究員を経て、関東学院大学、成蹊大学で教えられた後、1978 年に筑波大学に赴任され、1989 年の退官後も茨城大学ほかで教えられた。こうした経歴が示すように、港湾労働者の分析からスタートした先生のご研究は、I C U の研究所における東京郊外を舞台とした町内会やコミュニティ・パワーの調査を経て、当時大きな変貌を遂げつつあった都市へと向かう。それらの集大成が『都市コミュニティの社会学』であった。

中村先生のご業績を振り返る上で忘れることができないのは、早い段階からオリジナルな研究を海外向けに発表され、日本の都市社会学の成果を世界に紹介するとともに、国際比較の視点から研究を進められた点にある。国際社会学会 R C 3（community studies）のメンバーとしても活躍された先生は、海外研究者の知己も多く、来日される研究者の窓口的な役割も果たされていた。私事にわたるが、1988 年頃、来日する S・サッセン先生に筆者が会ったのも、もともと彼女が中村先生に面会を申し込んだのがきっかけであった。こう書くと、何かモダンな颯爽とした印象を若い方は持たれるかもしれない。しかし、何度か同席した海外の会議で印象的だったのは、どんなに高名な先生でもまた若い研究者でも、分け隔てなく議論をふっかけその場を紛糾させてしまう、いつも「熱い」ご様子だった。下町で育ち、米軍接收下にあった横浜の港で進駐軍や港湾労働者とともに働くなかで修得された先生の英語は、「べらんめえ」調だったが、しかし、「言うべきことは言う」という強い意志に支えられていた。

若い頃にずいぶん苦勞されたことを後にうかがう機会を得たとき、学問ができることの喜びを先生がいかに大切にされているか、それゆえ、とりわけ恵まれた若い研究者に対して厳しい言葉を励ましのつもりでぶつけてしまわれることを、遅ればせながら知った。1990 年の世界社会学会議の際だったろうか、マドリッドのバルで、国際基督教大学の生津晃一先生と 3 人で飲み出し、あまりに騒々しい議論（おもに中村先生だが）に、まわりのスペイン人があきれた様子を今もなつかしく思い出す。決して器用とは言えない先生のまっすぐな生き方を思い起こしながら、謹んで先生のご冥福をお祈りいたします。

会 員 異 動

新入会員（2009 年 3 月 8 日理事会承認）

< 関 東 > 佐藤彰彦（一橋大学大学院）

所属・住所・電話番号等連絡先の変更（2009 年 3 月 20 日まで受付分）

所属・住所等の変更

< 関 東 > 南後由和 東京大学
木下 聖 埼玉県立大学

住所・電話番号の変更

< 関 東 > 中野紀和

<中 部・関 西> 南川文里
<中国・四国・九州> 御葉袋啓子
三隅一人(所属先住所 〒819-0395 福岡市西区元岡 744 電話 092-802-5612)

退 会 (2009 年 3 月 8 日理事会承認)

<中部・関西> 山本剛郎

転居先等不明 (ご存じの方は学会事務局までご一報ください)

楊盈璋 田中恵 Yamaguri, Ana Elisa 原田真知子 仁井田典子 飯田豊 荒又美陽 金子毅
難波孝志 高木一成

学会事務局より

会費納入のお願い

前号の「学会ニュース」に 2008 年度分学会費の請求書・振替用紙を同封いたしましたが、まだ納入されていない方は早めの納入をお願いいたします。なお、前年度分までの学会費が未納の場合『都市社会学会年報』をお送りできませんので、ご了承ください。

- ◆ 本号では、「第 27 回大会」の予告として、「歓迎のことば」および「県立広島大学への交通案内」等を山本努会員にお寄せいただきました。どうもありがとうございました。
- ◆ 次号の学会ニュース (No. 83) は、「第 27 回大会特集号」として、大会プログラム、テーマ部会・シンポジウムの紹介、自由報告要旨、会場案内などを中心に編集し、7 月下旬頃にお届けする予定です。ご期待ください。
- ◆ 今年の大会では役員選挙が予定されております。
- ◆ 本学会も加盟している「社会学系コンソーシアム (J C S S)」については「社会学系コンソーシアム・ホームページ」<http://www.socconso.com/index.html> をごらん下さい。

(事務局 江上 渉)